

〈書評〉

徐阿貴著

『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成
——大阪の夜間中学を核とした運動』

(御茶の水書房 2012年 283頁 ISBN 978-4275009685 5,400円+税)

森 千香子



正直に言おう。本書を読むまで、わたしは夜間中学についてそれが存在するという以外、よく知らなかった。ましてや大阪にこれだけ生徒数が集中していること、しかもその大半が在日朝鮮人女性一世であることは全く知らず、とても驚くと同時に恥ずかしかった。だがひょっとすると、同じような反応を示す人もいるかもしれないので、内容の紹介に入る前に、本書のテーマである在日朝鮮人女性一世が夜間中学で運動をはじめた経緯を簡単に説明したい。

大阪の夜間中学に在日朝鮮人女性一世が多数在籍するのは、彼女たちが日本の教育制度から排除されてきたからである。教育を受けられず、読み書きもできないまま家庭とエスニック社会で生きてきた彼女たちが、子育てを一段落させた中高年にさしかかったころ「勉強したい」と通学を希望し、夜間中学に通うようになった。東大阪の夜間中学ではこのような女性が大幅に増え、既存の学校設備では対応しきれなくなった。そこで行政が急遽、別の場所に「分校」をつくったが、その環境はこれまでの夜間中学に激しく劣るものだったため、生徒である女性たちが「分校」にも通常の夜間中学と同様の環境を与えてくれるよう、行政に求めたのが運動の始まりだった。

本書はこうして始まった運動の展開を描きだし、それがこれまで在日朝鮮人女性によって展開されてきた様々な社会運動と比べてどのように位置づけられるのか、また当事者の女性にどのような意味をもっていたのか、また当事者だけでなく、地域社会やエスニック社会のジェンダー構造にどのような影響を与えたのかについて、インタビュー調査と参与観察を通して明らかにしていく。

本書は序論と終章のほか、五章で構成されている。一章では在日朝鮮人女性運動を理解するための分析枠組が提示される。ジェンダー規範とエスニシティの規範（従来から組織されてきた民族運動）からの自律性をもとに、四つの類型化が行われ、本書がとりあげる夜間中学運動は、ジェンダー規範からもエスニシティの規範からも相対的に自律した「新しい」運動として位置づけられる。二章では、在日朝鮮人女性一世を担い手とする夜間中学運動が、同じ地域で展開されるその他のマイノリティ運動とどのような関係を結び、それがどのような影響を及ぼしたのか、またこうしたマイノリティ運動の相互作用を通じて本書のキー概念である「下位の対抗的な公共圏」が形成されてきたのかが示される。三章では女性たちが運動に参加するまでのライフヒストリーが描き出される。在日朝鮮人女性たちはエスニシティ、階級、ジェンダーと何重もの抑圧の構造におかれてきた。そんな彼女たちが日本の夜間中学に通うということは、ジェンダーとエスニシティの両面で夫の求める規範からの逸脱を意味する。こうした障害を女性たちがどう乗り越えているのかが明らかになる。

四章では在日朝鮮人女性の主体形成において、またマイノリティ運動による下位の対抗的な公共圏の形成において、マジョリティの言語能力の習得（特に書き言葉）がいかに重要であるかが示された。日

本語能力を獲得したことで、女性たちの立場はホスト社会との関係においても、家庭内のジェンダー構造にもおいても以前より有利になっていることが示された。五章では在日女性のための学習支援組織や、高齢者向けのデイハウスといった「場」での参与観察を通じて、伝統的な民族文化を保有する一世と、ホスト社会の言語能力を身につけた二世以降が交流することで新しい連帯が築かれ、それが女性たちの民族アイデンティティやエスニック社会のジェンダー構造、ホスト社会の民族秩序にも影響をおよぼし、変化をうながしていることが示される。

本書を評価したい点は複数ある。まず、これまで学術的関心を寄せられてこなかった夜間中学の運動を掘り起こし、その重要性を示したこと。その重要性が当事者の主体形成に関わるだけでなく、地域社会で展開される様々なマイノリティ運動の軸にもなり、地域社会の変革に看過できない影響力を及ぼしていることを示した点。筆者がきわめてローカルな地点から構造的な変化を鮮やかに捉えることに成功したのは、長年にわたって丁寧に積み重ねられた実地調査の賜物だろう。

また本書は、これまでステレオタイプで語られることの多かった在日朝鮮人女性一世の現実に迫り、新たなイメージの提示に見事に成功している。本書で描かれる在日朝鮮人女性の姿は、受動的で抵抗する術をもたない中高年女性というステレオタイプとはかけ離れている。さらに彼女たちの展開する運動の質も、従来のイメージを裏切るようなものである。筆者が説明するように、従来の在日朝鮮人女性の運動に比べて夜間中学運動は、①民族組織からの自律性が高く、②「母」、「妻」というジェンダー役割に規定されていないという特徴がみられる。つまり民族や家族など他の誰かのためでなく、「自分たちのため」、「自分たちの権利の向上」をめざした運動だということ。その点で一世によるこの運動は「新しさ」を備えた運動として捉えることができる。

ところが面白いのは、このような彼女たちの運動が、一般に想起される「女性解放運動」のイメージとは、かなり異なる点である。それどころか、時には相反する方向性をもっているようにも見える。夜間中学に行きたいと願う女性の前に立ちはだかるのが、妻が日本の中学に行くことを快く思わない夫の存在である。だが妻はこうした夫のマッチズムを正面から批判することはない。だからといって夫の言いなりになって自分の意思を撤回するわけでもない。様々な手段をもちいて、時には遠回しな言い方をしながら、少しずつ夫が承諾するような方向にもっていこうとする。このような在日朝鮮人女性の振る舞いは、ステレオタイプ化された「受動的な女性」のそれではない。むしろ日常における抵抗の実践と呼べるものである。それが彼女たちの主体形成の出発点になっていることを、筆者は丁寧に描いていく。

表層的な観察からは見えてこない、在日朝鮮人女性による日々の「抵抗」は、地球の裏側での全く別の経験にもゆるやかに繋がっていく。その一つが在仏マグレブ移民女性の経験だ。フランスの旧植民地マグレブ三国（アルジェリア、モロッコ、チュニジア）出身の女性たちは、一般に「西洋にはもはや存在しない古いしきたりの中で抑圧される女」として表象されることが多い。中でもイスラムのスカーフを着用する移民女性は「男に服従する女」と見られ、女性解放運動とは無縁どころか、正反対の存在と思われがちだ。

だが当事者の声に耳を傾けると、ステレオタイプとは異なるマグレブ女性像が立ち現れる。伝統的な価値観を重んじる家族との衝突を避け、うまく家族との関係を保ちながら、外出など一定の自由を獲得するための交渉手段としてスカーフを着用する女性もいれば、家族はスカーフを強制しない、または（「反イスラムの空気が強いこの社会で『悪目立ち』する」として）着用に反対しているにもかかわらず

ず、フランス社会の厳しい移民差別に屈服せず、自らの差異をポジティブなものとして主張し、エスニック・アイデンティティを再構築する手段として自発的にスカーフを着用する女性もいる。

つまり民族、ジェンダー、階級と、複合的な差別構造におかれたマイノリティ女性たちが主体を形成するための道のりは、たった一つしかないわけではない。それは文脈や状況によって様々なかたちをとり、中にはいわゆる「女性解放」のイメージとはかけ離れてみえるものもある。このように、在日朝鮮人女性をテーマにした徐の分析は、フランスのマグレブ移民女性の経験も照らしだすような比較社会学の射程を備えている。ここにこそ、本書の醍醐味があると思う。徐自身も述べるように、東大阪市の夜間中学というローカルな場を基盤にした在日朝鮮人女性による運動は一見きわめて「個別」「ローカル」「特殊」な事例に見えるが、分析によって明らかになる構造は、日本という枠組みに限定されるものではなく、地球の反対側で暮らす人々の経験にもつながるような広がりをもっている。

本書において著者は在日朝鮮人女性に言及するにとどまり、比較社会学といった文言も使用されていない。それにもかかわらず、こうした比較社会学の展望を本書に見出すことができるのは、随所に著者のトランスナショナルでグローバルな視点を感じられるからだ。このような視野の広さは、著者のたどってきた軌跡とも全く無関係ではないと思われる。在日朝鮮人三世として横浜に生まれ、上智大学のフランス語学科で学んだ後、社会人として外国人向けの英語雑誌の制作に携わった。その経験がきっかけでエスニシティへの関心を深めるようになり、カナダのトロント大学に留学してエスニシティ研究を本格的に学ぶ。研究を進めるうちに、エスニシティ分析においてジェンダーの視点を取り入れることが重要だとの思いを強めるようになり、帰国後にお茶の水大学ジェンダー研究所の扉を叩いた。同大学に提出された博士論文をもとに書籍化した本書は、その功績が評価され、2012年度山川菊栄記念婦人問題研究奨励金を受賞した。

ローカルな主題を扱った本書のもつ広がりには、このような筆者のトランスナショナルな経験と幅広い知識にも水面下で支えられている。本書で論じられる問題がフランス以外の旧植民地宗主国や、それ以外の国でも観察されていることを考えれば、本書はきわめて普遍的な問題を提起するものであり、海外のジェンダー／エスニシティ研究にとっても極めて有益な内容となっている。だからこそ、本書の外国語への翻訳が行われることを期待したい。

(もり・ちかこ／一橋大学大学院法学研究科准教授)